

何を見つめ、授業を創っていくか

何を見つめ、子どもを育てていくか

1 テーマ 子どもが主体的に学び合う授業づくり

領域 各教科

2 仮説（視点）

(1)言葉の力をつける

(2)子どもの願いや関心を見る

(3)「させる」から「待つ」へ 「知識の伝授」から「気づかせる」へ

(4)ペア・グループ学習という子ども同士の交流の場を設ける

3 研究会の持ち方

(1)全体研究会とブロック研究会の両輪で (研究授業は一人1回)

ブロック研究会は授業の中のグループ学習に似ている。

よって、全体の場での総括が必要。全体研究会は年に3回がいいようだ

(1学期、2学期の初め、2学期の終わり)

(2)事後研究会

授業をビデオ撮影 ビデオで見ながら子どもの学ぶ姿について話し合う

(3)事前研究会 来年度も時間はとらない 授業者が先生方に自主的に問う

* 研究主任の仕事とは

1 先生方を主体にすること 主任がやりたいことをおしつけてはいけない

それは、先生方の主体性を奪ってしまうこと

2 先生方の実践から明らかになった理論を整理すること

「理論は実践の前にも後にもありますか？」

「そうですね。前に来れば仮説だし。」と小川雅子先生

私の研究 ——文章表現主体の育成——

<実践の前の理論>

- ①自分の表現の中にあるよさを自分で発見する
- ②見る力を養う記録活動をする
- ③教師の書く行為と教える内容を乖離させない
- ④記録文・報告文を重視する
- ⑤子どもが気づくようにする

<実践で明らかになった理論>

- ①自然の声を聞くという見る習作は子どもを見る力や表現力につながる
- ②見る力の高まりは他教科にも波及する
- ③「自分たちの文章にある間違いを見る」学習に集中し推敲の重要性にせまれる
- ④書くことは模倣ではなく表現である

今年度の授業実践から導き出された理論

南部小では、先生方一人ひとりが研究テーマを主体的に受けとめ、それぞれに自分の殻を破ろうとする実践をした。そこから見えてきた理論を整理し、南部小の財産としたい。

1 伝え合う「型」ではなく内容を優先する

モデル（話型など）を提示すれば伝え合う力が高まるということではない。子どもが何をどう伝えたがっているかという内容や方法、人とのかかわりのあり方を優先する方が、生き生きとした伝え合いが生まれた。

2 実の場を設定する

伝え合う「練習」ではなく、その場にいる教師などと直接、話したり聞いたりする場面を用意することで、現実の場面に生きる伝え合う能力を培うことができた。

3 子ども同士の交流による気付きは子どもを主体にし、子どもを変える

教師から指摘されたことは子どもの中に入らないことが多い。それは、「先生から直された」という客体の意識が強いからであると思う。しかし、子ども同士の気付きや感想を子どもは素直に受け入れ、自分を見つめ直そうとした。

4 教師からおろすのではなく子どもの声を聞くことが授業を変えていく

発言したことに対してどうしてほしいかなどについて子どもと話し合うことは、子どもの内にあった伝え合いについての考えを引き出し、聞いて返す力を育くんだ。

また、「ここではどんなことをしたい」と子どもの願いを聞くことが、教師では生み出せない楽しく力のつく方法を創造する契機となった。

5 型にとらわれない発言のさせ方の工夫が子どもを積極的にする

どうすれば、子どもの内にある悩みや不完全でもきらりと光る考え方を引き出せるかということを優先に考え、発言のさせ方を工夫しようとした教師の思いが子どもに伝わった。つまり、ここでも、挙手という型に子どもをはめようということではなく、子どもを主体にしようという考え方が貫かれている。

6 他のクラスとの交流は偏見のないかかわりを生み、子どもに自信をつける

子ども同士の学び合いは意義深い。学習内容もさることながら、偏った子どもへの見方が一新するきっかけとなり、その後の学校生活を明るいものにした。